**古代朝鮮語の母音調和を考えなおす**

**ー中期朝鮮語の音価を考える（その4）ー**

目次

1. 中声字の規定と母音調和　　　　　　　　　　　p2
2. 舌根説と中期朝鮮語の母音調和　　　　　　　　p5
3. 11母音体系と母音調和 （松本説）　 p7
4. 古代朝鮮語に母音調和は存在したのか　　　　　p8
5. 陰陽母音の音声の特徴とは何か　　　　　　　　p11
6. 日本語の母音調和論争をふりかえる　　　　　　p15
7. 古代朝鮮語の母音調和を考えなおす　　　　　　p17

【注】 　　　　　　　　　 p23

【引用書など】 　　　　　　　　　　　　　　　　　　p30

1. 中声字の規定と母音調和

『訓民正音』（解例本）合字解で、「〔43〕初声・中声・終声の三要素は、組み合わせて一文字を作る」（趙　2010：91）と述べられています。

この音節を三分する『訓民正音』の規定にたいして、河野氏は次のように述べられています（河野　1994：156）。

「パスパ字はチベット字を通してインド系文字の特徴である母音aの潜在的表示を承け継いでいるが、ハングルでは母音字（中声字）aを作っていて、その点、パスパ字より一歩進んでいる。（中略）中国音韻学では、音節を頭子音と韻とに二分する方法が古くから取られて来た。（略）。そしてこの韻の部分を母音と韻尾に分けて抽出することはついにしなかったので、中声の抽出は朝鮮で初めて行ったものである。」

また制字解では、「中声文字は凡そ十一字である。ㆍ音は舌を縮めて調音し声は深い。（以下、略）」（姜　1993：112）と記述されています。
　そこでその記述をまとめると次のようになります（姜　1993：81）。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 字形 | 象形内容 | 調音状態 | 声 | 制字順序 |
| ㆍ | 天円 | 舌縮 | 深 | 天開於子 |
| ㅡ | 地平 | 舌小縮 | 不深不浅 | 地闢於丑 |
| ㅣ | 人立 | 舌不縮 | 浅 | 人生於寅 |

それに続いて、次のように「～と同類」の規定がなされています（姜　1993：112,114）。

「この次の8声は,一つが闔（円唇母音）であれば一つが闢（張口母音）である。ㅗはㆍと同類で口をつぼめて調音し,その字形はㆍとㅡが合して成ったもので,天（ㆍ）と地（ㅡ）が初めて交わった意味を取ったものである。（略）ㅛはㅗと（字形又は音類上）同じだが（音価は）ㅣから始まる。（略）」

　＊「ㅗはㆍと同類で～」の「」はハングル打字上、ㅗに改めました。以下、同じ。
＊ㅛ,ㅑ,ㅠ,ㅕの再出字については注2の表。

上の「～と同類」の規定をまとめると、次のようになります（姜　1993：82）。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 系列 | 資質 | 字形 | 性格 | 陰陽 |
| ㅗ与ㆍ同 | 口蹙 | ㆍ＋ㅡ→ㅗ | 闔 | 陽 |
| ㅏ与ㆍ同 | 口張 | ㅣ＋ㆍ→ㅏ | 闢 | 陽 |
| ㅜ与ㅡ同 | 口蹙 | ㅡ＋ㆍ→ㅜ | 闔 | 陰 |
| ㅓ与ㅡ同 | 口張 | ㆍ＋ㅣ→ㅓ | 闢 | 陰 |

＊「蹙」：（物事が）急迫する。（眉を）しかめる等の意。

＊口蹙：口をすぼめる。口張：口をひろげる。闔：とじる。闢：ひらく。

そこで上の7母音相互の関係は次のように図式化できるでしょう（姜　1993：82）。

　　　　　ㅜ　　　　　ㅗ　　　口蹙

↑　　　　　↑

　ㅣ　　　　　　ㅡ　　　　　ㆍ　　　基本

↓　　　　　↓

ㅓ　　　　　ㅏ　　　口張

　　＊ㅣ（中立母音）は筆者補。

A図

また制字解にはㅣ（中立母音）をのぞく10母音が陰陽のグループにわかれるとの次の規定があります（姜　1993：114－5）。

「ㅗㅏㅛㅑの円（即ちᆞ）が（ㅡの）上と（ㅣの）外にあるのは,それが天（ᆞ）より生じて陽になるからである。ㅜ、ㅓ、ㅠ、ㅕの円（即ちᆞ）が（ㅡの）下と（ㅣの）内側にあるのは,それが地（ㅡ）より生じて陰になるからである。（略）天がまた三才の初めになるように,ᆞㅡㅣ3字が8声（字）の初めにありながら, ᆞ字がまた3字の首位になるのと同じである。」

そこでそれら7母音の関係は次のように考えることができます（福井　2013：44）。

|  |  |
| --- | --- |
| 陽母音　ʌ（ᆞ）　a（ㅏ）　o（ㅗ） | 中立母音　i（ㅣ） |
| 陰母音　ɨ（ㅡ）　e（ㅓ）　u（ㅜ） |

＊（　）内のハングルは筆者補。残りのㅛ,ㅑ,ㅠ,ㅕについては省略。
＊また、ㅓ/ㅕの音価（転写）は「ㅓ[ə]）/ㅕ[jə]」（趙　2010：45）。

＊ᆞの推定音価については注3。

そこで上の7母音と先の「縮」の規定から、不縮であるㅣを前舌母音、小縮である陰母音を中舌母音、縮である陽母音を後舌母音とみて、中舌母音と後舌母音の対立から中期朝鮮語に母音調和が考えられたのです4。

ここで現代トルコ語の母音体系をみてみると、次のようになっています（松本　2006：362）。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 調音位置 | 母音 | 呼称 |
| A類 | 前舌母音 | i　e　ü　ö | 女性母音 |
| B類 | 後舌母音 | ɨ　a　u　o | 男性母音 |

＊調音位置と呼称5は筆者補。

トルコ語ではこの女性母音と男性母音の対立が母音調和をなしているといわれ、次のような特徴があります（松本　2006：362）。

「トルコ語（また一般にウラル・アルタイ系諸語）では,形態法はもっぱら接尾辞により,接頭辞を用いないので,語頭音節は必ず語幹に属し,従ってこの調和は常に語幹から接辞へという方向での母音の順行同化という形をとる。（改行）この母音調和に関与する調音特性は,前舌性（または口蓋性）の有無と見られ,（以下、略）」

　＊「舌（面）の調和」（松本　2006：362,374）ともいわれます。

　そこで中期朝鮮語にも母音調和がみられることから、ウラル・アルタイ諸語との同系関係が取りざたされるようになりました6。

ここで中期前後の朝鮮語の母音体系を図式化すると、次のようになります。

『鷄林類事』時代に推定される音価　　　　15世紀（『訓民正音』）に推定される音価

ㅣ（i）　　ㅜ（ü）⇒　ㅗ（u）　　　　　ㅣ（i）　ㅡ（ɨ）　　ㅜ（u）

　　　　　　⇑　　　　　⇓

ㅓ（e）⇒　ㅡ（ə）　 ㆍ（ɔ）　　　　　 　　　　ㅓ（ə） 　ㅗ（o）

　　　　　　　　　　　⇓

ㅏ（a）　　　　　　　　　　　　　 　ㅏ（a） 　ㆍ（ʌ）

B 図（李基文　1975：116）　　　　　　C図（李基文　1975：157）

＊⇒, ⇓の印は筆者補。

＊B図中段の⇒以下の変化（李基文　1975：157）は押し連鎖と呼ばれます（松本　2006：370,372）。

＊C図（松本　2006：366のA図と同じ）は従来の説。

＊『鷄林類事』：（宋の孫穆1103～1104年）。

しかしその後C図の7母音体系では「「舌縮」を通常の意味の舌の位置とする解釈（筆者注：「舌縮」を後舌母音、「舌小縮」を中舌母音とみる）には大きな難点がある。」（松本　2006：370）との批判7が起こり、上の7母音体系と母音調和との齟齬が問題になりました。

1. 舌根説と中期朝鮮語の母音調和

前節では陰陽母音を中舌・後舌母音とみて、そこに従来の母音調和を考えることには問題があることをみました。しかしその後舌根説がでてきたことで、この問題を解決できるのではないかという期待が広がりました。

この舌根説を説明するまえに「シタの最高位でもって、母音を特徴づけていくやりかた」（橋本萬太郎　1981：231）である舌位説についてみておきます。

この舌位説については、次のような疑念がだされていました（橋本萬太郎　1981：230）。

「（上略）それまでの音感にたよる方式とは質的にことなる、舌位による記述を、まったく科学的なものとうけとるようになった。こうして、舌位説は、前世紀末までには（略）「語学者」のあいだに、絶大な信頼を確立してしまった。あえて「信頼」といったのは、そのなかの何人が、この母音記述の原理にまでさかのぼって、問題を検討したことがあったか、はなはだうたがわしいからである。8（略）」

このような問題をかかえた舌位説にかわる新しい母音記述法が求められていたとき、西アフリカのガーナで話されているアカン語の母音調和について、次のような発見と疑問がでてきたのです（橋本萬太郎　1981：238）。

「（高めの：筆者補）5母音とも（i、u、e、o,ɜ）、それを発音するさいには、この（筆者注:ノドボトケのうえ（舌骨のした））あたりの筋肉が、ぐっとさげられる（筆者注：「顎降」）のに、ひくめ母音（ɪ、ʋ、ɛ、ɔ、a）のほうには、まったくその徴候がみられないことにきがついて、こおどりされた。（略）つまり伝統的な観察だと（筆者注：高母音iと低母音ɪなどの対立を舌位説で考えると）,たかめ母音の発音にあたっては、シタぜんたいがひくめ母音の場合よりは、うえにもちあげられるはずである。ところが、そとからさわってみると、筋肉は、はんたいにさがっている。これはどうしたことだろう。（略）」

＊1966.3に発表された論文名：「アカン語の母音調和にみられる舌根位」（橋本萬太郎1981：233）。

そこでアカン語の母音の高低と舌の前後の動きには次のような関係があることがわかったのです（橋本萬太郎　1981：240）。

「ここでいう「たかめ母音」と「ひくめ母音」の「もっとも顕著なちがいは」、後者の発音にあたって、シタぜんたいが、かならずうしろにひかれていることである」

ところで口腔内におこる共鳴の声量をかえるためには次の3つの方法があることが知られるようになりました（橋本萬太郎　1981：239）。

「（1）　ノドボトケをさげる（もっと厳密には喉頭部をさげる）

（2）　シタぜんたいを、まえにすすめる（つまり、シタの根を咽頭壁からはなす）

（3）　咽喉部をひろげる」

などの方法によって、より声量のある、ふかいねいろの母音にすることができる（略）」

そこで舌根の動きと声量の大小（声の深みの度合い）が関係していることがわかり、これまでの舌位説にかわる、舌根の移動を考える舌根説9が登場したのです。

そしてこの舌根の動きを制字解の「舌縮・舌小縮・舌不縮」に対応させる、次の考えがでてきました（福井　2013：24）。

「舌の位置が喉の最も奥にある状態（縮）と,逆に最も前にある状態（不縮）の間の曲線を基本軸とし,次にその中間として小縮という状態を設定している。この3つを,調音器官の奥から順に「天地人」の象形で表したのが,基本的な母音ᆞ（ʌ）,ㅡ（ɨ）,ㅣ（i）である（下図を参照）。

　中立母音　　　　　陰母音系列　　　　陽母音系列

不縮 　　　　　　小縮　　　　　　　 縮

　　　　　　　　　ㅜ（u）　　　　 　ㅗ（o）

　　　　　　　　　⇑　　　　　　　　 ⇑　　　　　　口蹙（口をすぼめる）

ㅣ（i）①不縮 ―――ㅡ（ɨ）②小縮――― ㆍ（ʌ）③縮

　　　　　　　　 ↓　　　　　　　　↓　　　　　　口張（口をひろげる）

　　　 　　　　　ㅓ（e）　　　　　 ㅏ（a）」

　　　　　　　D図

＊上段の「不縮・小縮・縮」は福井氏による制字解の解釈。
＊中段の①不縮 ・②小縮・③縮は筆者による解釈（注29参照）。

＊中立母音・陰母音系列・陽母音系列と口蹙（口をすぼめる）/口張（口をひろげる）は筆者補。

そこで上のㅗ/ᆞ（通説ではo/ʌ）とㅜ/ㅡ（同じくu/ɨ）の違いをどちらも「円唇性（口蹙）の有無」（福井　2013：45）とみれば、次のような7母音体系10を考えることができるでしょう（福井　2013：45の図3.3）。

　　舌不縮　　　　　　舌小縮/舌縮

　　ㅣ（i）　　　　ㅡ（ɨ）/ㅜ（u）
 　　　　　　　 ∥

　　　　　　ㅓ（e）　　ᆞ（ʌ）/ㅗ（o）

 　 　　　　　 ∥

　　　　ㅏ（a）

　　　E図

　＊（　）内のハングルと舌不縮/舌小縮/舌縮、また母音を結んだ印（∥）は筆者補。
＊IPAの母音図とE図の母音体系には齟齬があります11。

1. 11母音体系と母音調和（松本説）

前節では7母音体系と母音調和との齟齬を解消できるとみられる舌根説を紹介しました。しかし母音体系と母音調和の整合を求める松本氏は「問題の母音組織を正しく再構するためには、11個の母音を全体として考察する必要がある。」（松本　2006：366）と考えられました。

そして制字解の「声深・声不深不浅・声浅」にたいする規定（姜　1993：112）から中期朝鮮語の11母音にたいして、新たに次のような関係を考えられました（松本　2006：368）。

|  |  |
| --- | --- |
| 声不浅母音 | ㆍ（ʌ）　 ㅡ（ɨ）　ㅗ（o）　 ㅏ（a）　 ㅜ（u）　ㅓ（ə） |
| 声浅母音 | Ø（yʌ）　ㅣ（i）　ㅛ（yo）　ㅑ（ya）　ㅠ（yu）　ㅕ（yə） |

＊（　）内のローマ字転写とØ（yʌ）は筆者補。
＊Ø：yʌの消失。ㆍ（ʌ）にたいする声浅母音Ø（yʌ）の存在と消失を考えることの問題については注12。

また制字解の「舌縮・声深」について、次のように考えられました（松本　2006：370—1）。

「一般に,舌（の本体）を収縮させると本体だけではなく舌根の部分が後退して,舌根部と咽頭壁の間の腔が狭まり,逆に舌面は相対的に低下して上顎との間の共鳴腔が広がるのが普通である。この共鳴腔の広がりは,母音の「きこえsonority」を増大させ,また咽頭壁の狭窄は母音に奥深い音色を与える。『解例』の著者が「舌縮」によって意味したのは,このような舌の収縮とそれに結びついた「舌根部の後退」（筆者注：-ATR（松本　2006：371））という現象ではなかったろうか。（以下、略）」

　そこで「「舌縮」はまさにATR（筆者注：舌根前方化）を逆の面から捉えた音声特性」（松本　2006：371）で、制字解の「口蹙・口張」の規定と合わせ考えて、松本氏は下記F図のような母音体系を考えられました（松本　2006：373）。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 　a）非口蓋性（声不浅）母音 | b）口蓋性（声浅）母音 | 音韻特徴 |
| 口不蹙　　　　口蹙－round　　　　＋round　 | 口不蹙　　　口蹙－round　　　＋round　 | 円唇性 |
| ɨ　　 　　　　　u　　╲　　　　╱　　　　　　　　　　　ə | i　　 　　　　 yu　　╲　　　　╱　yə | ＋ATR（陰母音） |
| ʌ　　　　　　 o　　╲　　　　╱　　　　　a | /　　　　　　yo　　╲　　　╱　　　　　ya | －ATR（陽母音） |
| 口不張　口張　口不張－low ＋low －low | 口不張　口張　口不張－low ＋low －low | 低舌性 |

＊F図

そしてこのような11母音体系を従来の「舌の調和」ではなく、「「舌根の調和」と呼ばなければならない。」（松本　2006：374）とされました13。

1. 古代朝鮮語に母音調和は存在したのか

前節まで中期朝鮮語の7（11）母音に母音調和をみとめようとする諸説を紹介してきました。しかし中期朝鮮語にみられた母音調和はその後乱れるようになり、現在に至っています。
　その母音調和の乱れの原因は次のように考えられています（李基文　1975：226）。

「母音ʌ（ㆍ）はすでに十六世紀に第一段階の消失（第二音節以下での消失、p.157-8：下注は筆者）を経たが、十八世紀になって第二段階の消失（語頭音節での消失）が起こったことによって、完全にその姿を潜めるに至った。語頭音節でʌが他母音に変った最初の例は、中世語の最後の文献である『小学諺解』（六－一二二）のhɨrk（土、＜hʌrk）であったが、（中略）現存資料中第二段階の消失に対して決定的な例を見せてくれるのは『漢清文鑑』である。この本にはrainyən（来年）とrʌinyən（以下、語例は略）（中略）これからして第二段階の消滅は大体一七七〇年より多少先立った時期、従ってほぼ十八世紀中葉に起ったものだと結論することができる。第二段階における変化公式は、主としてʌ＞aであった。（略）」

＊非語頭音節での「第一段階の消失は十五世紀にすでに芽生え、十六世紀になって完成した。その公式はʌ＞ɨであった。kʌrʌchi-（教える）＞kʌrɨchi-（略）」（李基文　1975：157－8）。また第一段階のʌ＞oの変化例は「somai（烈女図　四－一四、袖、＜sʌmai）」（同書：226）。

このような根源母音ㆍがㅡやㅏなどへ変化したことによって、ᆞとㅡ、またᆞとㅏなどの混交が多く起こり、母音調和が乱れ衰退していったとみることができるでしょう。

そこで古代朝鮮語の母音調和について、次のような考え方がでてきてもそう不思議ではないでしょう（李基文　1975：86）。

「現存古代語資料は、母音調和の確実な証拠を示してくれない。例えば郷札表記（下注）には、母音調和による語尾の交替形は反映されなかった。（下述「文法」参照）しかしこのような事実から古代語に母音調和がなかったと言い切ることは速断であろう。中世語と近代語において早い時期に遡ればのぼるほど、母音調和の強かったことが現われる事実に照して見るならば、古代語には非常に厳格な母音調和が存在したという推測が可能になる。そしてその母音調和は、後舌母音（a,ɔ,u）と前舌母音（ä,,ü）の両系列からなった、いわゆる口蓋的調和であったものと推定される。（略）」

　＊筆者注：少し見にくいはɔに黒丸2点（‥,ウムラウト）を付加した代用字。

＊筆者注：郷歌には「吾肹（나ᄂᆞᆯ）,目肹（눈을）’（略）などのように表記され,母音調和法則の支配を受けた表記上の痕跡は全然ない。」（金東昭　203：77）。

しかしこのように古代朝鮮語に母音調和があったとみる考えに真っ向から反対する、次のような考えがあります（金東昭　2003：77）。

「古代韓国語の母音論において一番問題になる部分は、母音調和が存在したかどうかと言う点である。一部の学者は、後代に下るに連れてこの現象は弱化しはしたが15世紀には母音調和の現象は明白であったのだし、この現象がアルタイ諸語に共通する特徴であると言う理由で、古代韓国語には厳格な母音調和現象が存在したであろうと推定した。しかし、現在の我々の資料には古代韓国語の母音調和の痕跡を示すものは全然ない。（以下、略）」。

　金東昭氏が上で根拠がないとしてあげられている古代朝鮮語の固有名詞表記にみえる混交例を次にみてみます（金東昭　2003：68－9）。

|  |  |
| --- | --- |
| ㅡとㅓの混交 | 近[근]品縣＝巾[건]品縣, 智證[증]王＝智訂[정]王 |
| ᆞとㅏの混交 | 帶[ᄃᆡ]山縣＝大[대]尸山, 呑[ᄐᆞᆫ]＝旦[단] |
| ᆞとㅗの混交 | 呑[ᄐᆞᆫ]＝頓[돈],夫斯[ᄉᆞ]＝扶蘇[소] |
| ᆞとㅜの混交 | 内 [ᄂᆡ] 只＝訥[눌]祇,斯[ᄉᆞ]同火縣＝壽[수]同縣 |
| ᆞとㅣの混交 | 昧[ᄆᆡ]谷縣＝未[미]谷縣,吉次[ᄎᆞ]・吉士[ᄉᆞ]＝稽知[지] |

＊中期朝鮮語にみえるᆞとㅡとの混乱例は注14。

＊金氏の根源母音‘ヽ’は‘ᆞ’に改めてあります。

そしてこれらの混交例は「‘ヽ’と‘ㅡ’の音韻的差異が当時の人々に殆ど認識され得なかったことを物語る証拠15」（金東昭　2003：194）であると考えられました。また「現存古代語資料は、母音調和の確実な証拠を示してくれない。」（前出）のであれば、ᆞとㅡとの間に母音調和を考えるのは難しいでしょう。

では古代朝鮮語に母音調和はあったのでしょうか、それともなかったのでしょうか。そもそもこの見解の違いは何が原因なのでしょうか。

この問題を考えるために泉井・羅氏の分類に従って、中期朝鮮語の陰陽母音の対立を次にみてみることにします（泉井・羅　昭和43：11－2,13－20）。

|  |  |
| --- | --- |
| 語幹内部（下注A） | 陽性調和：ᄇᆞᄅᆞᆷ（바람）,노로（노루）,하ᄂᆞᆯ（하늘） |
| 陰性調和：드르（들）,스굴（시골）,허믈（허물） |

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 陽性調和 | 陰性調和 |
| 体言 | ㅏ（陽）・ㅓ（陰） | ＋対格語尾 | 남ᄋᆞᆯ/나ᄅᆞᆯ | － |
| 胡方ᄋᆞᆯ/兵馬ᄅᆞᆯ | 功徳을/－ |
| ㅗ（陽）・ㅜ（陰） | 오ᄉᆞᆯ/二百戸ᄅᆞᆯ | 賢君을/我后를 |
| ㆍ（陽）・ㅡ（陰） | 바ᄅᆞᄅᆞᆯ/王事ᄅᆞᆯ | 千金을/그를 |
| 絶対格ᄋᆞᆫ/은（ᄂᆞᆫ/는） | ᄋᆞᆫ（ᄂᆞᆫ）（消失）  | 은（는） |
| 造格ᄋᆞ로/으로 | ᄋᆞ로（消失）/으로（標準語） | 으루（北部方言：下注B） |
| 処格（与格）애/에《円覚経諺解》 | 바ᄅᆞ래（애消失） | 여스세 |
| 所有格(屬格)ᄋᆡ/의,ㅅ《竜飛御天歌》 | 남ᄀᆡ（나무의）（ᄋᆡ消失） | 닐흐늬（일흔의） |
| 用言 | 形容詞を造る：갑다/겁다《釈譜詳節》 | 갓갑다 | 즐겁다 |
| 接辞가/거《金剛経諺解》 | ～아라　ᄒᆞ行가니 | ～ᄒᆞ거니와（違反形） |
| 用言の名詞化—ㅁ（-m）｟金剛経諺解｠ | 아로ᄆᆞᆯ（知） | 더루믈（除） |
| 副詞,連用形아/어《竜飛御天歌》 | ᄂᆞ라（날아） | 드러（들어） |
| 漢字語 | 盗賊　도ᄌᆞᆨ（도석）《竜飛御天歌》 |

＊（　）内は現代語。《　》は文献名。
＊A:「中期語現代語より語幹内部における母音調和が,より規則的であり,破格例を見出すことがむしろ困難ある。」（泉井・羅　昭和43：12）。

＊B:「北部方言（平安道,咸鏡道地方）では（略）中世以前に於ては陽性の《ᄋᆞ로》に対応する陰性の《으루》が存していたことが推定される。（陰性の造格語尾《으로》は調和の原則に違反する形態である。）」（泉井・羅　昭和43：14）。

＊接辞—다—（消失）/—더—,以下、未来時称接辞などは省略。
＊つなぎ母音については第8節参照。

1. 陰陽母音の音声の特徴とは何か

ここで泉井・羅氏の記述から対立する陰陽母音の音声特徴を次にみてみます（泉井・羅　昭和43：21）。

「陰性系列の母音は相対的に開口度が小さく,所謂《舌小縮》であるため口腔の共鳴腔は,母音の響きは相対的に小さく,聴覚的印象は暗い（筆者注：「声不深不浅」）。これに対して陽性系列の母音は相対的に開口度が大で,《舌縮》であるため口腔の共鳴腔は,母音の響きは相対的に大きく,聴覚的印象は明るい（筆者注：「声深」）。従って, これら母音の調音における《舌縮》,《舌小縮》の要素の介在による母音の響きにおける明暗の醸成が朝鮮語における母音調和現象の語構成論的基礎となっている。原注40）」

　　＊語の上の黒丸点（●）は原文では語の下に打たれています。以下、同じ。

そして泉井・羅氏は15～16世紀の母音調和の特色を次のようにみられました（泉井・羅　昭和43：21）。

「①　個々のの語幹（語根）内部や語幹と接辞の間で母音調和が作用する。（略）陽性および陰性母音が共存することは,ほとんどありえないか,或いはまれである。

②　母音調和は常にの母音の性質によって、後続する母音系列が決定される。これは改めていうまでもない。

③　朝鮮語の母音調和は母音の相対的な舌の高低,即ち開口度の相対的な大小によって区分される陰陽両の個々の系列内で作用する語音構成の現象である。原注41）そして朝鮮語の母音調和は, ① 順行的（前進的）母音調和であり,② 相対的なの部類に対して相対的なの部類が相対している。（以下、略）」

そこで上の3項目のうち①排他性（共存しない）は③相対的な低・高母音の対立に含めると、15～16世紀の母音調和の特色は②順行同化と③相対的な低・高母音の対立の二つにまとめることができるでしょう。

まず③相対的な低・高母音の対立について考えることにします。

泉井・羅氏は「本質的には母音調和現象と関連しない問題である」がと、前置きしたうえで、次のような意義分化の例をあげておられます（泉井・羅　昭和43：24-6）。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 中世語  | 同一意義 | 現代語（意義分化） |
| 갓/것 | もの,こと | 物　갓믈《訓蒙字会》 | 아오것도《月印釋譜》 |
| 한갓：ただ,それだけ、など | 것:不完全（形式）名詞 |
| 마리/머리 | 頭,首 | 마리：頭,首《訓蒙字会》 | 頭는 머리《訓民正音諺解》 |
| 마리：下注A | 머리：下注B |
| 갓ᄀᆞ-/것그- | 切, 折, 削 | 갓ᄀᆞ＞깎：削,刻 | 것그＞꺾：折,切 |
| 사/서, 나/너  | 셋,넷（3,4） | 사흘,나흘（3日,4日） | 서되, 너되（3升,4升） |
| 아/어,야/여 | 牙歯, 8 | 아금이, 야닯 | 西南方言 | 어금이, 여덟 | 標準語など |

＊A :家畜,家禽,魚類等を数える時の単位名詞として。
＊B :頭部,頭髪,脳髄,理解力,尖端などの多様な意味を持つ。

＊文字下の黒丸小点は省略。

そして「中期においては一部の語に限定されていたにせよ,陰陽両母音（相関的対立をなす対において）がていた（略）現代では完全に意義的範疇の対立を示すようになってきた」（泉井・羅　昭和43：26—7）として、次のような例をあげられました（泉井・羅　昭和43：27－30）。

|  |  |
| --- | --- |
| （a）完全に意義分化した語例原注53） | （b）ニュアンスの違いだけにとどまっている語例（この種の例はいわゆる《擬声擬態語》におおい――その例は略する） |
| 陽性語 | 陰性語 | 陽性語 | 陰性語 |
| 갗（皮,皮膚） | 겉（表面,外面） | 곱다（おる――指などを） | 굽다（屈,曲） |
| 날（日,天気） | 늘（常に,日頃） | 얕다（浅,低） | 옅다（浅,薄） |
| 밝다（明） | 붉다（赤,朱） | 얌치（廉恥〔否定的に〕） | 염치（廉恥）（下注） |

＊「《얌치》はもともと漢字語の《염치（廉恥）》（体面と恥を知る心〔気持〕）から派生した陽性母音を含む語である。（略）したがって,をもつものであるが,（略）《얌치》は（略）《염치》の意味を卑賎化して,主に否定的な意味に使われる.」（泉井・羅　昭和43：27－30）。

そこで上で「その例は略す」とされた擬声・擬態語と色彩語のニュアンスの分化をみてみると、次のようになっています（李翊燮など　2004：128-130）。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 母音交替 | 意味 |
| 陽母音 | 陰母音 |
| 擬声・擬態語 | 平音 | 퐁당 | 풍덩 | ぽちゃん |
| 졸졸 | 줄줄,질질 | 水が流れる様子 |
| 한들거리다 | 흔들거리다 | ゆらゆらゆれる |
| 激音 | 탄탄하다 | 튼튼하다 | 丈夫だ |
| 濃音 | 따갑다 | 뜨겁다 | 熱い |
| 色彩語 | 平音 | 노랗다 | 누렇다 | 黄色い |
| 激音 | 파랗다 | 퍼렇다 | 青い |
| 濃音 | 빨갛다 | 뻘겋다 | 赤い（下注） |

＊「빨갛다,파랗다,노랗다は明るく鮮明な色彩を表し,뻘겋다,퍼렇다,누렇다は暗く濁った色彩を表す。16」（李翊燮など　2004：130）。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 子音交替 | 意味 |
| 平音 | 激音 | 濃音 |
| 擬態語・色彩語 | 부석부석 | 푸석푸석 | － | かさかさ（もろい） |
| 구깃구깃 | － | 꾸깃꾸깃 | くしゃくしゃ |
| 발갛다 | － | 빨갛다 | 赤い（下注） |
| － | 새카맣다 | 새까맣다 | 真っ黒だ |
| 감감 | 캄캄 | 깜깜 | 真っ暗だ |

＊「子音交替に従い,濃音は強い語感,激音は激しい語感を表す。」（李翊燮など　2004：131）。

そして擬声・擬態語や色彩語のニュアンスの違いについて次のように考えられました（泉井・羅　昭和43：30－1）。

「このような陰陽両母音の生理的音声と物理的音響の共通性と差異性に基いて,聴覚的印象の深浅,明暗等を醸成し,このが朝鮮語の語形成に直接関連し,子音の三列体系,即ち,平音,激音,濃音による同一系列の語の意味的ニュアンスの分化と共に、母音交替による〈큰　말〉「大語」（陰性語）,〈작은　말〉「小語」（陽性語）の如き朝鮮語独特の語彙分類を可能にして来たと思われる。」

さて元に戻って、次は②順行同化の問題を考えます。そのために言語の特性についての橋本萬太郎氏の考えを次にみてみることにします（橋本萬太郎　1980：154,159）。

「人類の言語は、、宿命的に負っている、ひとつの絶対的な、物理的制約がある。（略）その発出にあたっては、一定の音波を、時間の一軸に沿うという、リニアー（筆者注：線条の）なかたちで、ならべていくよりしょうがない、という制約である。」（…中略…）

「つまり、言語によっては、

出てこられる母音の種類の制約（アルタイ諸語）

アクセントの縮約（日本語、朝鮮語など）17（以下、略）

のように、物理的事件としては、さまざまであるが、言語事象としては、これを一歩抽象化すれば、これらにすべて、それぞれの言語におけるシンタグマのマーカーとしての、普遍的な役割のあることが、わかってくるのである。、これがなければならないかは、こうして、はじめて、了解されてくるのである。」

このようにそれぞれの言語にはその言語特有のシンタグマ・マーカーが存在すると思われます。たとえばカンコンやコンカンのような擬声語が日本語には普通には存在しなくて、カンカンやコンコンのような同音反復語が存在するのは言語のリニアーな特性と後置詞（接尾辞）を膠着させる性質を持つ日本語が発音のしやすさ18を求めたためとみることができるでしょう。

ここまでの考察によって母音調和の特色である②順行同化は膠着語的な朝鮮語のリニアーな特性がおもてにあらわれたもの、また③相対的な低・高母音の対立（陰陽母音の交替）は時代とともにニュアンスの違いを生じ、さらには意義の分化にまで発展したと考えることができるでしょう。

1. 日本語の母音調和論争をふりかえる

前節では母音調和の特質は②順行同化と③相対的な低・高母音の対立（陰陽母音の交替）にあるとみました。そこで疑問になるのですが、順行同化と相対的な低・高母音の対立（陰陽母音の母音交替）の二つがみられれば母音調和なのでしょうか。それとも順行同化がなく、相対的な低・高母音の対立のみであれば母音交替なのでしょうか。母音調和と相対的な低・高母音の対立（陰陽母音の交替）とは何が違うのでしょうか。あまりにも単純な疑問で笑われそうですが、この問題を考えるために日本語とウラル・アルタイ語族との同系問題に対する論争をふりかえってみることにします。

明治41年に日本語とウラル・アルタイ語族との同系問題の解決にむけて「藤岡勝二が一四箇条19をあげて日本語と“ウラル－アルタイ語”との類縁性を強調的に指摘したとき、母音調和の現象のみが日本語にみられないことがそのひとつの障害となって（以下、略）」（佐佐木　1978：322）いました。その後橋本進吉氏が「奈良時代には、普通のイ（i）・エ（e）・オ（o）の他にイ乙類（ï）・エ乙類（ë）・オ乙類（ö）という母音が存在し」（大野　昭和32：151）たことを再発見されました20。これは上代特殊仮名遣いといわれているものですが、それ以来奈良時代以前の母音は上の6母音とア・ウを合わせて8つであるとする考えが通説となっています。その後有坂氏がこの上代特殊仮名遣いに「音節結合の法則」21を発見されました。そして古代日本語にその第1則の「甲類のオ列音と乙類のオ列音とは、同一結合單位内に共存することが無い。」（有坂　昭和32：103）ことから、日本語には母音調和が存在するという考えがでてきたのです。そしてこの考えは「直ちに,「日本語＝ウラル・アルタイ同系説」という方向に結びつけられ22」（松本　2006：361）たのです。

　このように日本語同系問題を解くための重要な鍵とみられた音節結合の法則がみつかったことで、すぐにも古代日本語とウラル・アルタイ語の同系問題は解決すると思われました。しかし、それは戦前にはかなわず戦後に持ち越され、戦後、服部四郎氏や大野晋氏の朝鮮語やアルタイ諸語との同系を示唆する論文がでました23。昭和32年には平易な啓蒙書である『日本語の起源』（旧青版：岩波新書）がでて、日本語の起源（アルタイ諸語との同系）解明への期待が高まったのです。そして昭和50年、松本克己氏の「古代日本語母音組織考――内的再建の試み」の論文がきっかけとなり、再び上代特殊仮名遣いにたいする論争がもちあがったのです24。

今では過去となったこの論争の問題点を論争の渦中におられた松本氏は次のように述べられています（松本　1995：10－11）。

「ただ,重大な点は,このような形（筆者注：「音節結合の法則」）でとらえられたオ列音の分布上の特徴が,氏によってアルタイ諸語やウラル語に見られる「母音調和」の現象に結びつけられたことである。上代語における母音の結合的関係を全体として眺めると,またオ列母音の場合にしても,これを注意深く観察するならば,「母音調和」という観点からは説明の困難な現象がいくつも見出されるわけであるが，有坂氏によるこの解釈ないし推測は大きな影響力を及ぼし,一般に上代語母音の甲類・乙類の区別を漠然とアルタイ語的な母音調和と結びつけ,たとえば甲類は「陽母音」,乙類は「陰母音」と見なすような考え方が,これまでかなり支配的だったように見受けられる。」

そして上の観察をもとに次のような考えをだされました（松本　1995：88）。

「有坂氏によって「音節結合の法則」という形でとらえられたオ列音の結合分布上の特異性は,実は,変異音分布の「相補的」現象にほかならず,アルタイ語的な「母音調和」とは全く無縁なものと見なければならない25。古代日本語における真の意味の「音節結合の法則」をもし樹てるとすれば,それは「同一語幹内において/a/と/o/は共存しない」という形で表されるであろう。すなわち,/o/は語幹部において/a/の交替音として現れた母音であった。この母音交替の出現は,日本語の相当古い時期に遡るものと推定される。（以下略）」

＊筆者注：このあとa,i,uの3母音が日本語の最古層の母音組織であり、その後a～oの母音交替によって、a,i,u,oの4母音になり、このa/oの分化が「日本語における語形成と形態法の発達にとって重要な役割を演ずるものであった。」（松本　1995：88）と指摘されています。

このようにして日本語との同系を証明するための最後の鍵とみられた母音調和は母音交替現象であったとみられるようになり、日本語と朝鮮語、あるいはアルタイ諸語との同系証明は再び先に持ち越されることになったのです26。この上代特殊仮名遣いをめぐる論争は母音調和とは似て非なる、母音交替現象をアルタイ諸語の母音調和とみてしまったことを教えてくれたのです。これが今から40年以上前に世間をにぎやかした上代特殊仮名遣い論争の経緯です。

1. 古代朝鮮語の母音調和を考えなおす

前節では明治以来今日まで続く日本語の起源探求の足跡をみてきました。

そこで母音調和とみられている古代（現代）朝鮮語と母音交替だったとされた古代（現代）日本語を次に比べてみます。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 中期朝鮮語 | 古代日本語 |
| 母音調和/母音交替 | 後続の接辞類にもおよぶ母音調和 | 語幹内にとどまる母音交替 |
| ②順行同化 | 助詞接辞は膠着 | 「花肹：곶을」（下注A ） | 「波奈乎」（下注B ） |
| 言語の線条性 | 語順/意味・空間・時間（意味範囲の広→狭）：両言語は同じ（下注C）  |
| 同音反復 | 집집（家々）（李翊燮など　2004：121） | 家々 |
| ①排他性 | 陰陽母音にわかれる | オ甲（o）/オ乙（ə）の非共存など |
| 語幹と対格助詞 | 胡方ᄋᆞᆯ,兵馬ᄅᆞᆯ/功徳을（このあとのつなぎ母音参照） | － |
| 語幹と所有格助詞 | 남ᄀᆡ（나무의）/닐흐늬（일흔의） | /手のひら（助詞～な/～の） |
| 言語の一般的特徴 | 舌小縮・声不浅不深/舌縮・声深 | 下注D |
| ③高・低母音の対立 | 意義分化 | 밝다（明）/붉다（赤,朱） | い/るい（同音） |
| ニュアンス | 찹다（冷,涼）/춥다（寒） | い/とい |
| 擬声・擬態語 | 감감/캄캄/깜깜（平・激・濃音） | コロコロ/ゴロゴロ（清・濁） |
| 퐁당/풍덩（ぽちゃん） | かたかた/ことこと（擬音語） |
| 色彩語 | 빨갛다/뻘겋다（赤い） | 玉/玉（下注E） |
| 方言 | 아금이（西南方言）/어금이（標準語など）（「牙歯」） | 子ら/こ甲ろ乙（下注F ） |

＊第5・6節の語例を使用。

＊A：「花肹」（「花を」中世語koc-ɨr）」（福井　2013：184）。「ᄇᆡᆺ곶「梨の花」」（趙　2010：81）。

＊B：「阿乎夜奈義烏梅等能波奈乎」（「青柳梅との花を」；万葉集5巻821番）。

＊C:「主語－目的語—動詞。「香りはバラがよい。/バラは香りがよい。」。「大韓民国ソウル特別市鐘路区世宗路1番地」。「1996年9月1日午前6時20分」（李翊燮など　2004：194,195－6；訳文）。

＊D:「諸言語をつうじて、一般にせま母音はひろ母音にくらべてきこえがちいさいばかりでなく、気づかれない程度であるにせよ、他の条件がおなじならば、わずかにみじかめに発音される傾向にある。（略）」（上村　昭和47：279－280）。

＊E：「①白色の美しい玉。はくぎょく。特に、真珠をさしていう場合もある。/①白い色の玉。」（日本大辞典刊行会編　昭和49（第11巻）:43,99）。

＊F：「こ甲ろ乙（名）ラの東国語形。（略）「烏とふ大をそ鳥のまさでにも来まさぬ君をくとぞ鳴く」（万三五二一）」（上代語辞典編修委員会編　1967:314）。

ここで現代の韓国語（朝鮮語）にもみられる同音反復語についてみておきます（李基文　1975：258）。

「母音調和は極度に衰退したが、まだ言語使用者によってはっきりと意識される。それは陽母音a,oと、陰母音ə,uの対立を主軸とし、主として擬声語と擬態語に著しい。例。cor・cor―cur・cur,ar・rak・tar・rak―ər・rək・tər・rəkなど27。」

このように日本語にもみられる同音反復語を②順行同化の一種とみれば、上表の比較でわかるように、韓国語と日本語の形態的特徴はよく似ているといえるでしょう。

そこで韓国語の母音調和と母音交替の関係についての李翊燮氏たちの考えを次にみてみます（李翊燮など　2004：129）。

「（現代語にみられる擬声・擬態語の：筆者補）母音交替は歴史的に韓国語の母音調和現象を支配してきた「陽性母音：陰性母音」の対立とほとんど対応している。ところで陽性母音である애,아,오は韓国語の母音体系にあって前舌,中舌,後舌の系列でそれぞれ最も下に位置する母音であるために母音交替は「低母音（開母音）：高母音（閉母音）」の交替と解釈することができる。」

＊泉井・羅氏も同じように低母音と高母音の対立と考えられています（泉井・羅　昭和43：9。注29の図）。

ところでトルコ語の母音調和は「常に語幹から接辞へという方向での母音の順行同化という形」（松本　2006：362）をとります。そこで韓国語の擬声・擬態語の母音交替が陰陽母音の対立とほとんど対応しているのであれば、韓国語と日本語の違いは古代朝鮮語が後続の助詞・接辞類に及ぶ母音交替、古代日本語が語幹内にとどまる母音交替であるとみることもできるでしょう。

ところで松本氏は古代朝鮮語とウラル諸語やギリヤーク語などの太平洋沿岸諸語の母音調和との違いと類似を次のように述べておられます（松本　2006：373－4,376）。

「MK（筆者注：中期朝鮮語）の母音調和に関してもうひとつ注目されるのは,陰・陽2類の母音の対立が単に同一語内での共起制限というphonotacticな規則としてだけでなく,この2類の母音の交替が意味的ないし音象徴的な機能と結びついて、語の派生や造語法の面でかなり重要な役割を演じていることである。母音調和が生産力を失った現代語においても,陰母音と陽母音のこのような対立は,とりわけ擬声・擬態語の形成の中で活力を維持している。つまり,MK の母音調和には,意味的・形態的機能を帯びた母音交替というもう一つの側面があって,この点も,チュルク語やウラル語には見られないMK の母音調和の際だった特徴として指摘しておく必要がある。＊原注7」

そこで古代朝鮮語とアルタイ諸語の母音調和、そして古代日本語の母音交替の特質を比較してみると、次のようになります。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 語幹内にとどまる/助詞・接辞へおよぶ | 意味的・形態的機能 |
| 古代朝鮮語 | 助詞・接辞におよぶ母音調和（母音交替？） | 機能をおびる |
| 古代日本語 | 語幹内の母音交替 | 機能をおびる |
| アルタイ諸語 | 接辞へおよぶ母音調和 | 機能はおびない |

上の比較から古代朝鮮語にはチュルク語にはない意味的・形態的機能がみられ、古代朝鮮語はアルタイ諸語とはまた違ったタイプの母音調和とみなければならないでしょう。

ところで第5節で陽性調和と陰性調和の例をみてみましたが、ここでもう一度、体言語幹に対格助詞がつづく語例をみてみると、次のようになります（泉井・羅　昭和49：13－4)。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 陽性調和 | 陰性調和 |
| ᅡ/ᅥ | 남ᄋᆞᆯ/나ᄅᆞᆯ | 功徳을 |
| ᅩ/ᅮ | 오ᄉᆞᆯ/二百戸ᄅᆞᆯ | 賢君을/我后를 |
| ᆞ/ᅳ | 바ᄅᆞᄅᆞᆯ/王事ᄅᆞᆯ | 千金을/그를 |

＊上表は第5節の表（10頁）より。

ところで上にみられる対格助詞r,ʌr/ɨr,rʌr/rɨrと動名詞語尾（筆者注：-m,-n,-rqなど）の前に現れるつなぎ母音（ʌ/ɨ）との並行性について、次のような考えがあります（福井　2013：171）。

「例えば対格助詞には,中世語では-r,-ɨr,-rɨr（筆者注：-ㄹ,-을,-를）という3つの形態があるが（母音は,実際には母音調和にしたがってʌ/ɨ（筆者注：ᆞ/ᅳ）の交替をする）,最初のものは母音語幹に付き,2番目のものは子音語幹に付く。3つめのものは重複形と見て除外すれば, 母音語幹にrが付き,子音語幹にはʌ/ɨを介してrが付くわけで,このʌ/ɨは上で見てきたように用言語幹と語尾の間に入るつなぎ母音と同じ性質のものであることがわかる。」

上の考えをわかりやすくまとめると、次のようになります。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 前の音節 | 後続音節 | 母音調和 |
| 体言語幹のあと | 用言語幹のあと |
| 対格助詞（-r,-ɨr,-rɨr） | 動名詞-m（ᄆ） | 派生名詞-m（ᄆ） |
| 1 | 母音おわりの語幹 | ᄅ（r） | ᄆ（m） | ᄆ（m） | － |
| 2 | 子音おわりの語幹 | ᄋᆞᆯ/을（ʌr/ɨr） | 옴/움（om/um） | ᄋᆞᆷ/음（ʌm/ɨm） | する |
| 3 | 重複形とみる | ᄅᆞᆯ/를（rʌr/rɨr） |  | する |

＊以下の考察のために転写は通説による。

＊派生名詞の場合、子音語幹おわりの後とmの間に挿入される母音ʌ/ɨがつなぎ母音。動名詞語尾-m（ᄆ）のまえにあるom/umのo/uは先語末語尾28。

上表からわかるように、-m（ᄆ）の前に挿入されるつなぎ母音ʌ/ɨと対格助詞ʌr/ɨrには並行的な関係がみられるので、対格助詞ʌr/ɨrのʌ/ɨを用言の子音語幹おわりにつくつなぎ母音ʌ/ɨと同じものとみなせるでしょう。

ここで上表3の不規則になっている対格助詞ᄅᆞᆯ/를（rʌr/rɨr）について考えます。

このᄅᆞᆯ/를を李基文氏は次のようにみられました（李基文　1975：160）。

「対格語尾では-rʌr/rɨrの場合母音調和をみせたが、これは一次的対格語尾-rに二次的対格語尾が連結母音（ʌ/ɨ）をもって接続したものと解釈される。」

しかし上のように一次的対格語尾rにつなぎ母音ʌ/ɨを介して二次的対格語尾rがついているとみれば、ᄅᆞᆯ/를には対格助詞rが二つあることになります。またᄅᆞᆯ/를を「重複形とみて除外すれば…」（前出）と考えるなら、ᄅ（母音語幹おわりに）やᄋᆞᆯ/을（子音語幹おわりに）とは違う不規則形がなぜ生まれたのかが問題となるでしょう。そこでᄅᆞᆯ/를が不規則になっている理由をうまく説明できるように少し柔軟な考え方をしてみます。

上表第1と第3の母音おわりの語幹をCV1,CV3、また第2の子音おわりの語幹をCV2X2(X2：鼻音・閉鎖子音を問わず、音節末子音)とします。なおCV1,CV2X2,CV3が2音節以上であれば、それらの最後の音節をCV1,CV2X2,CV3とします。また対格助詞ᄅᆞᆯ/를にはᆞ/ᅳ（ʌ/ɨ）が内在しているとみて、そのʌ/ɨをYとします。そして子音語幹おわりの対格助詞ᄋᆞᆯ/을をʌ＋r/ɨ＋rとみて、そのrを本来の対格助詞と考えRとすれば、ᄋᆞᆯ/을はYRと表わすことができるでしょう。すると母音語幹おわりに対格助詞ᄅᆞᆯ/를がついたものはCV3rYR、また子音語幹おわりに対格助詞ᄋᆞᆯ/을がついたものはCV2X2YRと表わせるでしょう。そこでCV3rYR はもと子音語幹おわりであったと考え、C***V***3X3＋YR→CV3rYRと変化するようなC***V***3X3を考えます。つまり対格助詞ᄅᆞᆯ/를が現れる母音語幹おわりのCV3rYRはもと子音語幹おわりのC***V***3X3にY、さらに本来の対格助詞Rがついたものとみるのです。
　話がややこしいので、図式で表わすと次のようになります。

2. 子音語幹おわりに対格助詞ᄋᆞᆯ/을（ʌr/ɨr）がつく：（CV2X2＋Y＋R→）CV2X2YR

3. 母音語幹おわりに対格助詞ᄅᆞᆯ/를（rʌr/rɨr）がつく：（C***V***3X3＋Y＋R→）CV3rYR

＊Y：ʌ/ɨ。R：本来の対格助詞（仮にｒ）。
＊X2, X3：鼻音・閉鎖子音を問わず、ある不明の子音。
＊C***V***3X3：C***V***3X3YR→CV3rYRの変化を起こす、ある不明の語幹。

そしてさらに上表1の母音語幹おわりに対格助詞rがつく場合にも同じような考え方をすると、次のような変化を考えることができます。

1. 母音語幹おわりに対格助詞ᄅ（r）がつく：（C***V***1X1＋Y＋R）→CV1R

2. 子音語幹おわりに対格助詞ᄋᆞᆯ/을（ʌr/ɨr）がつく：（CV2X2＋Y＋R→）CV2X2YR

＊Y：ʌ/ɨ。R：本来の対格助詞（仮にｒ）。

＊X1：鼻音・閉鎖子音を問わず、ある不明の子音。

＊C***V***1X1：C***V***1X1YR→CV1Rの変化を起こす、ある不明の語幹。

このように考えれば、「重複形は除外する」といった不規則な対格助詞ᄅᆞᆯ/를（rʌr/rɨr）や母音語幹おわりにつく対格助詞ᄅ（r）もすべて子音語幹おわりに対格助詞ᄋᆞᆯ/을がついたと定式化（CVX＋YR）できるでしょう。そしてその後さらに、子音語幹おわりのCVXYRに考えたようにC***V***＋R→CVXYRの変化を起こすC***V***を考えます。つまりYが内在化したC***V***（＝CVX＋Y）に本来の対格助詞Rが続いているとみるのです。ところで第5節の陽性・陰性調和の表にみられるように対格助詞や動名詞語尾mだけではなく、他の助詞や接辞にも母音調和はみられます。そこで助詞と接辞のこのような並行性を考えると、古代朝鮮語は語幹と語幹内に存在するつなぎ母音とのあいだに母音調和がみられるということができるでしょう。つまり古代朝鮮語の母音調和は後続の助詞・接辞につづく母音調和ではなく、日本語と同じような語幹内における母音調和とみられるでしょう。そして韓国語の擬声・擬態語の「母音交替は（略）「陽性母音：陰性母音」の対立とほとんど対応している。」（李翊燮など　2004：129）のであれば、中期朝鮮語の母音調和といわれたものは日本語と同じような母音交替であると考えられてくるでしょう。

ここでTVの推理ドラマを考えてみます。推理ドラマでは犯人が巧妙なトリックを使ってアリバイを作り、そのアリバイによって事件はなかなか解決にいたりません。しかしドラマの主人公は皆が知らず知らずに陥っている思い込みを捨ててそのアリバイの盲点を見つけだし、犯人を追いつめ、最後には犯人を逮捕します。推理ドラマの醍醐味はこのアリバイくずしにあるといえるでしょう。そこでこのたとえ話は我々は何かをいったん思い込むと、原点にたちかえって物事を考えなくなるということを教えてくれるでしょう。

ここまで母音終わりの語幹のなかにつなぎ母音を還元する（つなぎ母音の内在を考える）アイディアを書いてきました。そして古代朝鮮語は母音調和ではなく、母音交替だったのではないかと話を進めてきたのですが、このような考えは机上の空論にみえるでしょう。そこでさらに屋上屋を重ねるような空論はやめて、「古代朝鮮語には母音調和がある」という思い込みを捨てるために、「母音調和の問題は棚上げにしよう」という提案をだしておきます。推定された7母音の音価によってどのような母音調和が存在したのか、あるいは母音調和があるという前提で、7（11）母音の音価を推定したり、アルタイ諸語との同系を考えたりすることはやめようというのです。その代りに『訓民正音』時代の中声字の母音の音価を探求し、その音価を確定することに力をそそぐことにしましょう。7母音の音価が確定すれば、陰陽母音のあいだにある関係が従来のアルタイ語的な母音調和であるのか、それとも松本氏が考えられる舌根による調和であるのか、はたまた泉井・羅氏や筆者が考えるような相対的な低・高母音の対立（単なる母音交替）なのかは、その時はっきりするでしょう。この「母音調和の問題は棚上げにしよう」という提案は古代朝鮮語とアルタイ諸語との同系問題を真摯に追い求める努力に水をさすものだと非難かもしれません。しかし古代朝鮮語の真実の姿を知るためには、「母音調和があったという」思い込みを捨てる必要があるでしょう。

最後に制字解の規定（趙　2010：42－3,47,67）にたいする筆者の考えを図表化しておきます29。

|  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 天・地・人 |  | 闔 | 闢 |  | 闔 | 闢 |  |
| ㅣ（不縮,声浅） | ㅡ（小縮,声不深不浅） | ㅡと同 | ㅜ | ㅓ | ㅜ,ㅓと同 | ㅠ | ㅕ | 相対的に高母音 |
| ㆍ（縮,声深） | ㆍと同 | ㅗ | ㅏ | ㅗ,ㅏと同 | ㅛ | ㅑ | 相対的に低母音 |
|  |  | 口蹙 | 口張 |  | 口蹙 | 口張 |  |

＊闢：ひらく。闔：とじる。口蹙：口をすぼめる。口張：口をひろげる。

＊G図（筆者の解釈）

【注】

1. 諺解本では「ㄱᄂᆞᆫ엄쏘리니君군ㄷ字ᄍᆞᆼ처ᅀᅥᆷ펴아나ᄂᆞᆫ소리ᄀᆞᄐᆞ니（略）」。

その訳文は「ㄱは牙音で,例えば「君군」の字音の初めの音が初めて発せられる声と同じで（略）」（姜　1993：153,153）。2重下線の全清字ㄷがそれです。傍点は省略。

1. 中声字の分類（姜　1993：84）。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 根源母音 | ㆍ（ʌ） |  |
| 基本母音 | ㆍ（ʌ） | ㅡ（ɨ） | ㅣ（i） |  |
| 第1次派生母音 |  | ㅗ（o） | ㅏ（a） | ㅜ（u） | ㅓ（ə） |
| 第2次派生母音　 | ㅛ（yo） | ㅑ（ya） | ㅠ（yu） | ㅕ（yə） |
| 合用字 二字合用字　 | ㅘ（wa） | ㅝ（wə） | ㆇ（yoya） | ㆊ（yuyə） |
| 与ㅣ相合者　 | ㆎ（ʌi） | ㅢ（ɨi） |  | ㅚ（oi） | ㅐ（ai） | ᅱ（ui） | ㅔ（əi） |
|  | ㆉ（yoi） | ㅒ（yai） | ㆌ（yui） | ㅖ（yəi） |
| ㅙ（wai） | ㅞ（wəi） | ㆈ（yoyai） | ㆋ（yuyəi） |

＊根源母音は筆者の命名。姜氏の基本字・初出字・再出字は上のように名づけなおしました。

＊（　）内の転写字は李基文氏のもの（李基文　1975：xix）を使用。

1. 「現代済州島方言のㆍの音価は[ɔ]であるが,MK（筆者注：中期朝鮮語）では,一般に,中舌（または後舌）非円唇母音と解釈され,通常ʌで表記される。」（松本　2006：366）。
2. 母音調和について初めて言及されたのは小倉進平氏（『郷歌及び吏讀の研究』：昭和3年）です。

「（上略）之に依つて觀る時は、細部に至つては多少の例外が存するにしても、大體に於て、朝鮮語には左の三式（筆者注：下記のイ・ロ・ハ）の母音調和が行はれて居ることを結論するに足るであらう。

イ、強母音　아・야・오・요・ᅌᆞ
ロ、弱母音　어・여・우・유・으

ハ、中性母音　이・으」（小倉　昭和49：555）

＊強母音・弱母音・中性母音の右側の○印は全て省略。

「助動詞の變化圖（改行）一、この諧音（筆者注: [音](https://ja.wiktionary.org/wiki/%E3%81%8A%E3%81%A8)が[調和する](https://ja.wiktionary.org/wiki/%E8%AA%BF%E5%92%8C)こと）といふのはㅏㅑㅗㅛᆞを甲種、ㅓㅕㅜㅠㅡㅣを乙種の母音として、一の單語の中には甲種なればどこまでも甲の母音、乙種なればどこまでも乙の母音しか使はないのをいふのである。（次項と、のちの語例・表は省略）」（前間　昭和49：34）。

1. 「「女性・男性」という名称は伝統的な蒙古語学に由来し,「陰・陽」は,後に見るように,『訓民正音』以来の朝鮮語学の呼び方である。」（松本　2006：362）。
2. 「朝鮮語を研究したの内外言語学者たちは主に母音調和現象の存否が,所謂≪ウラル・アルタイ語族≫との関係の有無を決定する有力な根拠の一つになるという観点から,即ち朝鮮語の系統の解明を目的として研究をすすめてきた。原注1」（泉井・羅　昭和43：1）。
3. 「前舌母音の系列にあまりにも「あきま」が多く,母音体系の在り方としてはかなり異常だと言わざるをえない。また（A）のような母音体系（筆者注：本文のC図の体系）を想定すると,16世紀に起ったとされるʌとɨの合流もうまく説明できない。両者の調音域があまりにもかけ離れているからである。原注＊4」（松本　2006：366）。
4. 「円唇母音発出のための、シタのひきということも、まったく無根拠で、[i]：[ü]のようなばあいでさえ、ちがいは舌位の高低にすぎないこと――そして、それは言語のちがいにかかわらないこと――が判明しているのである。」（橋本萬太郎　1981：230）。
5. 最初アフリカのアカン語について報告されたので、「「舌根前方化Advanced Tongue Root」 略してATRと呼ばれ」（松本　2006：371）、後方性（-ATR）をもふくめ、舌位説にたいするものとして舌根説（橋本氏は舌根理論とも）と呼んでおきます。
6. 「金完鎭（1978）では,ATRという用語は用いていないが,舌の動きを総体的に捉えている点では,これに一脈通ずるものがある。」（福井　2013：45）と福井氏は述べられていて、金完鎭氏の考え（E図）は舌根説によるものではなさそうです。
7. IPAによればʌ（非円唇母音）にたいする円唇母音はɔ なので、ʌの「口蹙」（口をすぼめる）はoとはいえないでしょう。またㅜをu（円唇母音）とするなら「ㅡの口蹙がㅜ」の規定、つまり口をすぼめたものがuであるので、ㅡはɯ（uの平唇母音）となります。またそうでなくㅡをɨとするならㅡ（中舌のɨ）のすぼめ（「ㅡの口蹙がㅜ」）はuではなく、中舌のüとなるでしょう。下のH図参照。

　前舌　　　　　　中舌　　　　　　後舌

非円唇/円唇　　非円唇/円唇　　非円唇/円唇

狭母音　　i/（y）――――｟ɨ｠/｟~~u~~｠―――（ɯ）/u

　　　　　　∖ ｟ɪ｠/｟ʏ｠　　｟ʋ｠　 　　∕

半狭母音　　　e/（ø）　　　　　　　　 （ɤ）/o

　∖　　　（ə）/｟ɵ｠　　　 ∕

半広母音　　　　　ɛ/（œ）　　　　　 （ʌ）/ɔ

　　　　　　　　｟æ｠ ∖　 ｟ɐ｠　　　 ∕

広母音　　　　　　　　　a/｟ɶ｠―――――ɑ/（ɒ）

＊H図
＊1989年（改訂版）のIPA（国際音声学会編　2003：付表）による。

＊基本母音四角形（シュービゲル　1982新版：47、橋本萬太郎　1981：219）。

＊（　）や｟ ｠のないものは第1次基本母音。（　）内は第2次基本母音。｟ ｠内は第1・2次基本母音以外の母音。
＊集賢殿の学者たちはㆍ/ㅡの「口蹙」をㅗ/ㅜとみていましたが、ㆍ/ㅡがʌ/ɨであるかどうかはいまだ確定していません（まちがいです）。そうであるならㆍ/ㅡの「口蹙」をo/uとみることには問題があり、ㆍとㅗ、ㅡとㅜの関係を本文E図のように考えることは（きちんとした説明がないかぎり）直ちにはできないでしょう。

1. 李基文氏は「十五世紀資料にyəra（の）、yərəが共存する。この語は＊yʌraに遡及するものと推定される。即ちこれは本来陽母音の語であったが、yʌがyəに変ってyəraになったのである。ここで再び母音同化が起こり、yərəが現われるようになったものと考えられる。」（李基文　1975：158）とyʌの存在とその消失を考えられました。そして松本氏はこの考えを受けてʌに対応する母音yʌ（声浅母音）の存在を考えられました。しかし文献で実証されるのはʌ→ɨ（15世紀頃：非語頭）、ʌ→a（18世紀頃：語頭）（李基文　1975：226）などで、yʌ→yəの変化は李基文氏の希望的観測（推定）に過ぎず、yʌra→yəra→yərəの変化は恣意的すぎるでしょう。

『訓民正音』（解例本）の合字解には「ㅣで始まるㆍやㅡは、わが国の言葉では用いることがない。ひょっとして、児童の言葉や田舎の言葉にはこの音があるかもしれないが、このときは二字を合わせて用いればよい。ᄀᆝᄀᆜの類である。縦が先で横が後なのは、他の場合と異なる。」（趙　2010：100）と、ᄀᆝ（kyʌ）やᄀᆜ（kyɨ）の表記がみられます。これにたいして趙氏は「…忠清道方言には[jɯ:ŋ]「まったく」（標準語「영」[jɔ:ŋ]）など[jɯ]がありうる。また[jʌ]（ᆝ）は済州島方言[jɐsɐt]「六」（標準語「여섯」[jɔsɔt]）などがありうる。現代の朝鮮語方言学では、[jɯ:ŋ]を「ᄋᆖᆼ」、[jɐsɐt]を「ᄋᆢᄉᆞᆺ」のように表記することがある。」（趙2010：101）と注記されています。

また『訓民正音』（解例本：1446年）当時にも軽唇音のㅸ/ㅱ（『四声通解』：崔世珍撰1517年序；小倉　昭和50：267）や「ᄃᆞᇌᄣᅢ爲酉時之類」（趙2010：93,95）、『訓民正音』（諺解本：1447年？）には「ᅎ字等は歯頭の音に用い（略）ᅐ字等は正歯の音に用いるもので（略）」（姜　1993：162）、『伊路波』には「は/京」（京大國語國文研編　昭和40：3,4）、また『語音翻譯』（1501年）にも「我是日本國的人ᄝᅡᆫ야마도피츄」（東條　昭和44：写真版1）など特別な表記はいろいろみられます。
　ところで李基文氏は合字解の「ㆍㅡ起ㅣ聲、於國語無用。児童邉之言、或有之」（趙　2010：影印（訓民正解例23a）：前出の原文）の記述を「当時のある方言にyʌ（筆者注：ᄋᆝ）,yɨ（筆者注：ᄋᆜ）が存在したという貴重な証言である。」（李基文　1975：158）と考えられました。しかし当時の標準音にyʌやyɨがなかったために、当時の文献にyʌやyɨがみられなかったとしても、最近になるまで方言音などにyʌやyɨの表記がまったく登場してこなかったのはなぜでしょうか。yʌの消失が「15世紀中葉からそれほど遠くないようである」（李基文　1975：158）のなら、人々の記憶にまだまだ残っているはずのyʌを集賢殿の学者たちは「ㅣ（i）で始まる。」（趙　2010：44）yʌとして規定したと考えるのが自然ではないでしょうか。しかしyʌは「わが国の言葉では用いることがない。」（前出）と記述されているのであれば、古代～中期朝鮮語にはyʌはなく、ᄋᆢᄉᆞᆺのような方言音は『訓民正音』時代以後に発生したとみるべきでしょう。そしてそうであるならㆍと対となるᆝ（yʌ ）がyəに合流することで、yʌが消失したとみる考え（李基文　1975：158）、それを受けた「ʌに対応する母音（yʌ）が声浅母音」（松本　2006：368）と考えることは間違いでしょう。声不浅母音（ʌ）と声浅母音（yʌ）が対立（松本　2006：368）しているとみるのであれば、同じようにɨ（声不浅母音）の対立母音（声浅母音）はiではなくyɨとするのが正しいでしょう。

1. ギリヤーク語の母音調和は一般的には「舌の高低の調和」（下のI 図）とみられていますが、松本氏は「舌根の調和」とみられています（松本　2006：375）。

 i　　 u

　╲　　╱　　　　陰母音（劣勢母音）

　 ə

e　　　o

╲　 ╱　　　 　陽母音（優勢母音）

 　 a

　　I 図

制字解ではㅡは「小縮」、ㆍは「縮」と規定され（趙　2010：42）ていて、通説によればㅡはɨ、ㆍはʌなので、ㅡとㆍはともに非前舌的な音とみられます。しかしそのㅡとㆍに対応するギリヤーク語の母音（第4節p7－8のF 図参照）はi/e、チュクチ語はi/e2,またアメリカのネズバーズ語はi1/i2（ともに松本　2006：375,377,380）などとすべて前舌的な音です。そうすると、それら太平洋沿岸諸言語型の言語はすべて前舌的、それに対応する中期朝鮮語は非前舌的なので、中期朝鮮語はギリヤーク語などとはまた違った第3のタイプの母音調和とみなければならないでしょう。

1. 中期朝鮮語の混乱例（金東昭　2003： 153－7）。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | ᆞとㅏの混乱 |  | ᆞとㅡの混乱 | ᆞとㅗ/ㅜの混乱 |
| 第一音節 | ᄌᆞᆷ[月曲118]⇔자시ᇙ 제[月曲118]（睡眠） | ᄉᆞᅀᅵ[釋譜6:3]⇔슷[月釋7:58]（間） | ᄠᆞ로[釋譜6:7]⇔ᄠᅩ로[圓覺,序:2]（別） |
| 第二音節以下 | 아ᄅᆡ[月釋21:120]⇔아래[釋譜11:32]（前） | 世宗代 | 슬ᄒᆞᆫ[釋譜24:29]⇔슬흐며[釋譜23:6]（悲） | 世宗代：어ᄂᆞ[龍歌87]⇔어느 [龍歌118, 釋譜6:11,24：25] ⇔어누[釋譜9:35]（何） |
| 世祖代 | 두ᄆᆞᆫ（留）[月釈,序:22]⇔ᄭᅮᆷ을[月曲8]  |

＊金氏の根源母音‘ヽ’は‘ᆞ’に改めてあります。

＊月曲：『月印千江之曲』（1447年）。釋譜：『釋譜詳節』（1447年）。月釋/月釈：『月印釋譜』（1459年）。圓覺：『圓覺經諺解』（1465年）。龍歌:『龍飛御天歌』（1447年）。

1. 「（上略）目的格助詞‘-ᄅᆞᆯ/-를’、補助詞‘-ᄂᆞᆫ/-는’、冠形詞形語尾‘-ᄂᆞᆫ/-는’、補助的連結語尾‘-ᄀᆡ/-긔,—ᄋᆡ/‐의’、現在時相先語末語尾‘-ᄂᆞ‐/‐느‐’のどちらか一方を期待しなければならない環境でも、先行母音が陽母音であるか陰母音であるかに関係なく殆ど‘-ᄅᆞᆯ,-ᄂᆞᆫ,-ᄂᆞᆫ,—긔/-의,—ᄂᆞ’だけが現れることもある。これは‘ヽ’と‘ㅡ’の音韻的差異が当時の人々に殆ど認識され得なかったことを物語る証拠となる。」（金東昭　2003：194）。
2. 「陽性母音と陰性母音の対立は早くから音声象徴（phonetic symbolism）と関連して関心を集めてきた。母音이は母音調和としては中立母音であるが,音声象徴においては陰性母音系列に属する。そうして音声象徴上,陽性母音系列と陰性母音系列は次のように分けられる。
　（2） a.（陽性母音）아,애,야,오,외,요,와,왜

b.（陰性母音）어,에,여,우,위,유,워,웨,으,이,의

これらの中で陽性母音側は‘明るく,軽く,澄んでいて,小さく,少なく,鋭く,薄く,強く,速く,若い’感じを与え, 陰性母音側は‘暗く,重く,濁っていて,大きく,多く,鈍く,厚く,弱く,のろく,老いている’ 感じを与える。このような対立を強調し,前者を特に指小系列とよぶこともある。」（李翊燮など　2004：129）。この対立は日本語の清濁、たとえば「弱い－強い（略）上品－下品」（小松　昭和56:75）などの語感の違いに似ているでしょう。

1. 省略した項目は次のとおり（橋本萬太郎　1981：159）。

「音節音調のサンディー（閩語、語など）

音域の制約（南島諸語、南アジア諸語）

屈折語尾（主なインド・ヨーロッパ語）

語末分節音（子音・母音）のサンディー（サンスクリット）」

1. 母音の前後がともに無声子音という環境において、母音の無声化が起こりやすいことについて声帯の制御を電気のスイッチに譬えて、off（無声子音）-on（母音：有声）-off（無声子音）から off-off（無声母音）-offへの「（上略）発話エネルギーを小さくするという省エネの原理が働いている。（改行）省エネというのは,これまでの言語学で惰性（inertia）,発音のしやすさ（ease of articulation）,あるいは経済性（economy）と呼ばれてきたものである。」（窪薗　1999：42－3）。
2. 類型的特徴の14か条：「①語頭に重子音が位置することがない。（改行）②固有の単語においては、語頭にr音が位置することがない。（改行）③母音調和がある。④冠詞をもちいることがない。（以下、略）」（佐佐木　1978：313）。
3. 上代特殊仮名遣いについての平易な解説書には『古代国語の音韻に就いて』（橋本進吉：1980　岩波文庫）があります。「奈良時代のいわゆる（筆者補：上代特殊仮名遣いの）「8母音」なるものは,書記法の作り出した“虚像”にすぎない。」（松本　1995:89）という批判があります。
4. 有坂氏の「音節結合の法則」（有坂　昭和32：103）。

「第一則　甲類のオ列音と乙類のオ列音とは、同一結合單位内に共存することが無い。

第二則　ウ列音と乙類のオ列音とは、同一結合單位内に共存することが少い。就中ウ列音とオ列音とから成る二音節の結合單位に於て、そのオ列音は乙類のものではあり得ない。

第三則　ア列音と乙類オ列音とは、同一結合單位内に共存することが少い。」

＊池上禎造氏も同時期に「古事記に於ける仮名「毛・母」に就いて」（「国語・国文」2-10（1932･10））を発表されています（筆者未見）。

1. 「語根において、男性母音は[u][o][ɑ]は互に結合しやすい傾向を有するが、女性母音は[ö]は、それら男性母音とは結合しにくい傾向を有し、殊に[o]とは絶対に結合せず、中性母音は[i]は、男性女性母音に結合するということとなる。これすなわちウラル・アルタイ諸語に見られる母音調和と極めて類似する現象である。ただ八世紀の日本語においては、この音節結合の法則性は語根のみに止って、接辞に及ばない。その相違点を含みはするが、この事実は、アルタイ諸語の有する母音調和と本質的には同一の現象であると言うことができよう。」（大野　昭和48：538）。
2. 服部四郎氏の「日本語と琉球語・朝鮮語・アルタイ語との親族関係」（『民族学研究』昭和23年：13-2 号）は『日本語の系統』（服部四郎著　岩波書店　昭和34）に、またその論文と大野晋氏の「日本語と朝鮮語との語彙の比較についての小見」（『国語と国文学』昭和27年：29－5号））は『論集日本文化の起源　第五巻　日本人種論・言語学』（池田次郎・大野晋編　平凡社　昭和48）に再掲されています。
3. 『金沢大学法文学部論集文学編』（第22巻：1975.3）に掲載された論文からはじまった論争については当事者であった松本氏自身の回顧の文章（松本　1995：177－188）に詳しい。
4. 「母音調和というよりも、すくなくとも共時論的にはxに関する連音規則である。」（亀井　昭和61：281）と批判された亀井氏の考えを、松本氏は「上代語のオ列甲・乙を直ちに音韻の問題として論ずる弊を戒め,何よりもまず書記法の問題として扱うべきだ」（松本　1995:185）とよりわかりやすい言葉になおされ、紹介されています。
5. 「（上略）とくに古代（または先史）日本語の母音組織と母音調和の問題は,ここで明らかとなった母音調和の2つのタイプ（筆者注：従来の「ユーラシア内陸型」とギリヤーク語などの「太平洋沿岸諸言語型」）という枠組みの中で改めて検討し直す必要があるけれども（略）」（松本　2006：388）と述べられています。
6. 「졸:다1自 ㄹ変減る。少なくなる。＜즐다。」/「줄다:自 ㄹ変減る。少くなる。小さくなる。＞졸다」。「알락-달락副 ㅎ形不整然とまだらになったさま：だんだら。まだらに。＜얼럭덜럭。」/「얼럭-덜럭副 ㅎ形（雑然と）まだらまだら。だんだら。てんてん＞알락달락。」（天理大学朝鮮学科研究室編　昭和42：607,621,405,427）。
7. 「動詞から派生した名詞としては、動詞語幹に-（ᄋᆞ/으）ㅁ（-（ʌ/ɨ）m）のつくのが代表的であった。ここで注意すべきことは、中世語においては動名詞は常に先語末語尾-오/우-（-o/u-）を持ち、派生名詞とは区別されていたという事実である。（p.186）例えば語幹yər-（実る）に-umがついたyərum（実ること）は動名詞であり、-ɨmのついたyərɨm（実）は派生名詞なのである。」（李基文　1975：167）
　＊上の記述に続く文章は下表のようにまとめました。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 陽性調和 | 陽性調和 |
| 母音終わりの語幹 | phom（掘ること、＜phʌ＋o＋m） | psum（用いること、＜psɨ＋u＋m） |
| 子音終わりの語幹 | capom（捕えること、＜cap＋o＋m） | məkum（食べること、mək＋u＋m） |

＊動名詞語尾（名詞形接辞-m：-ㅁ）は「常に意図法の先語末語尾（筆者注：o/u）と結合した」（李基文　1975：186）。＊phom/psumは上のように変化した。

1. 泉井・羅両氏による母音体系（泉井・羅　昭和43：9）。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 唇の状態 |  |
| 平唇,円唇でもない中立的状態 | 平唇（口張） | 円唇（口蹙） |
| 陽性 | 開母音 | 舌縮 | ㆍ（ʌ） | ㅏ（a） | ㅗ（o） | 相対陰性よりも低い母音 | 舌の高低 |
| 陰性 | 閉母音 | 舌小縮 | ㅡ（ɨ） | ㅓ（ə） | ㅜ（u） | 相対陽性よりも高い母音 |
| 中性 | 閉母音 | 舌不縮 | ㅣ（i）　 |  |  | 最も高い母音 |
|  | ㆍ後舌ㅡ中舌ㅣ前舌　 | 中舌 | 後舌 |  |
| 舌の位置 |

＊縮・小縮・不縮の解釈についての問題点：

泉井・羅氏（泉井・羅　昭和43：5）や福井氏（第3節D図）と同じように、松本氏も「ㅏは《ㆍと同じく（「舌縮・声深」という特性をもち）,さらに加えて「口張」という特性がある》という意味に理解しなければならない。」（松本　2006：367）と考えられています。しかし「縮・小縮・不縮」の規定（趙　2010：42）はㆍ,ㅡ,ㅣに、また「口蹙・口張」の規定（趙　2010：42－43）は第一次派生母音（ㅗ,ㅏ,ㅜ,ㅓ）と第二次派生母音（ㅛ,ㅑ,ㅠ,ㅕ）にたいしてなされています。そこで「ㅗはㆍと同類だが口がすぼまっている」の規定からは単にㆍの（口の）すぼまったものがㅗである（ㅗは口蹙）としかいえず、「ㅏの舌が縮まって音声が深い」（ㅏが縮）というためにはきちんとした説明が必要でしょう。筆者は制字解の規定通り、「口蹙・口張」の2項と「縮・小縮・不縮」の3項の規定とみます。筆者の考え（本文のG図）と上図との違いをみてください。

**【引用書など】**

有坂秀世（昭和32）『国語音韻史の研究　増補新版』　三省堂

池田次郎・大野晋編（昭和48）『論集　日本文化の起源　第五巻　日本人種論・言語学』　　平凡社

上村幸雄（昭和47）「第四章　現代の音韻」『講座国語史　第2巻　音韻史・文字史』　中田祝夫編　大修館書店

泉井久之助・羅鍾浩（昭和43）『言語研究』（第52号）　日本言語学会編・発行

大野晋（昭和32）『日本語の起源』（岩波新書：旧青版）　岩波書店

大野晋（昭和48）「日本語と朝鮮語との語彙の比較についての小見」『論集　日本文化の起源　第五巻　日本人種論・言語学』　池田次郎・大野晋編　平凡社

小倉進平（昭和49） 『小倉進平博士著作集（一）郷歌及び吏讀の研究』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

小倉進平（昭和50）　『小倉進平博士著作集（三）国語及朝鮮語發音概説　南部朝鮮の方言他』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

亀井孝（昭和61）『亀井孝論文集5　言語文化くさぐさ』　吉川弘文館

（1993）『ハングルの成立と歴史　訓民正音はどう創られたか』　梅田博之（日本語版協力）　大修館書店

京大國語國文研編（昭和40）　『弘治五年朝鮮板伊路波　本文・釈文・解題』　京都大學文學部國語学國文学研究室編　京都大學國文學會　＊明の弘治5（1492）年に朝鮮で刊行された『弘治五年朝鮮版伊路波』の複製

（2003）『韓国語変遷史』 栗田英二訳　明石書店

窪薗晴夫（1999）『日本語の音声』（現代言語学入門2）　岩波書店

河野六郎（1994）『文字論』　三省堂

国際音声学会編（2003）『国際音声記号ガイドブック―国際音声学会案内―』　竹林滋・神山孝夫訳　大修館書店

小松英雄（昭和56）『日本語の世界7　日本語の音韻』　中央公論社

佐佐木隆（1978）　「7　日本語の系統論史」『岩波講座　日本語12 日本語の系統と歴史』　風間喜代三ほか著　岩波書店

M.シュービゲル（1982）『新版　音声学入門 』　小泉保訳　大修館書店

上代語辞典編修委員会編（1967）『時代別国語大辞典　上代編』　三省堂

趙義成訳注（2010）『訓民正音』（東洋文庫）　平凡社

天理大学朝鮮学科研究室編（昭和55改訂版）『現代朝鮮語辞典　改訂』　養徳社

東條操編　『南島方言資料』　刀江書院　昭和44　＊『語音翻譯』（弘治14（1501）年の日付あり）は『海東諸國紀』（申叔舟著1471年の自序）に附載。

中田祝夫（昭和47）『講座国語史　第2巻　音韻史・文字史』　大修館書店

日本大辞典刊行会編（昭和49）『日本国語大辞典　第十一巻』　小学館

橋本進吉（1980）『古代国語の音韻に就いて　他二篇』（岩波文庫）　岩波書店

橋本萬太郎（1981）『現代博言学』　大修館書店

福井玲（2013）『韓国語音韻史の探究』　三省堂

前間恭作（昭和49）『前間恭作著作集（下巻）龍歌故語箋・雞林類事麗言攷他九篇』　京都大學文學部國語学國文学研究室編　京都大學國文學會　＊『龍飛御天歌』と『雞林類事』（宋の孫穆：1103～1104）の研究。

松本克己（1995）『第4巻　古代日本語母音論：上代特殊仮名遣の再解釈』（ひつじ研究叢書（言語編））　ひつじ書房

松本克己（2006）『世界言語への視座　歴史言語学と言語類型論』　三省堂

・・（2004）『韓国語概説』　前田真彦訳　梅田博之監修　大修館書店

（1975）『韓国語の歴史』　藤本幸夫訳　村山七郎監修　大修館書店

『郷歌』：「『三国遺事』（1285頃）に伝わる14首と『均如伝』（1075）に伝わる「普賢十願歌」11首を合わせて25首、または,これらに『高麗史』に伝わる1首を合わせて26首」（福井　2013：181）の古歌謡。

『鷄林類事』：宋の孫穆1103～1104年（→前間恭作）。

『月印千江之曲』：1447年。

『釋譜詳節』：1447年。

『龍飛御天歌』：1447年。

『月印釋譜』：1459年。

『圓覺經諺解』：1465年。

『伊路波』：1492年。

『語音翻譯』：中国語と琉球語の対訳集1501年（→東條操編）。